2年古典（古文）の授業・3

【教材】○○○○『○○　○○○○○』一〇～一一頁　**「大江山」（十訓抄）**

【授業者】国語科　中井　光

こんにちは！

中井のためぐち授業慣れてきたかい？　今日は「大江山」のラストだよ。今回もハイテンションでやっていこう！

●まず予習

さて、教科書の11頁1行目「小式部、これより～」から最後までだ！　へ？　少ないんちゃうん？だって？　いやいや、さっさと読み終わって、君らを敬語で苦しめてやるつもりなんだ。うしししし…覚悟しとけ！

まずは予習だよ。今回読む範囲で、チョー大事な古文単語はないんで、今日は別の予習課題を出しとこう。最後の行に「知られざりけるにや」ってあるじゃないか。この「られ」。そして、1回目にやった範囲の10頁3行目「歌詠みにとられて詠みけるを」の「られ」。そして、5行目「局の前を過ぎられけるを」の「られ」。この3つの「られ」の文法的な違いを調べてもらおうかな。そんなの無理ですぅ！だって？　無理ではない！　後の2つはすでに品詞分解しただろが！　それに今回やる範囲も品詞分解できなきゃならんわけで、できんことはない！　四の五の言わずに予習すべし！　今回やる範囲も意味をとっとけよ！

（自習すべし）

●本文を声を出して読む

さ～て、授業開始！　いつものように、まずは全文の音読だ。前回と同じ朗読ファイルを再生して、一緒に読もう。

（朗読ファイルを再生して一緒に音読すべし）

読みに注意する語は特にないけど、11頁1行目「小式部、これより、歌詠みの世におぼえ出できにけり」は、意味にしたがい「歌詠みの世に／おぼえ／出できにけり」と切って読む。そこんとこ注意しよう。

●本文の解釈

さて、まずは教科書11頁1行目からだ。

小式部、これより、歌詠みの世におぼえ出できにけり。

これ訳すの、「歌詠みの世におぼえ出できにけり」が、どこでどう切れてるのかわからんと難しいんだが、さっき読み方教えたから大丈夫だよな？　さあ訳してみて、そこの君。え？「『おぼえ』って何ですか？暗記？」って？　まさか…　じゃあ、とりあえず「名声」とでも訳してみて。「小式部は、これから後、歌人の世に名声が出てきた。」うん！なかなかいいね。「名声が高まった」もしくは「高まってきた」ということだけど、いきなり意訳せずに、まず原文の意味を押さえるのが、古文を読み解く力をつけるコツだからね。

〔文法〕

・　まず、品詞分解しておこう。

小式部、	これ	より、	歌詠み	の	世	に
名	代	格助・起点	名	格助・連体修	名	格助・場所
×	×	×	×	×	×	×

おぼえ	出でき	に	けり
名	カ変動	助動・完了	助動・過去
×	連用	連用	終止

・　「小式部、これより」は、「小式部は、これから」って意味だけど、「これから」って？　うん、そう、「この事件以降」ってこと。

・　「歌詠みの世」は、「歌人の世界」ってことさ。当時は貴族の教養として誰もが和歌は詠めなきゃつとまらんかったわけだけど、それだけに秀歌に対する基準も厳しかったはずさ。「歌人の世界」に認められるにはそうとうの力が必要だっただろうね。

・　さて、さっき「おぼえ」は「名声」って訳しとけって言ったけど、なんで「おぼえ」が「名声」って意味になるわけ？　これはもともと「おぼゆ」という動詞が名詞化したものだろ？　さあ、君、「おぼゆ」ってどういう意味の動詞だった？　ん？「思う」？　それは「思ふ」。「先生、『感じる』ってよく訳します！」だって？　うん、確かに。「おぼゆ」は、「思われる」が基本的な意味だよ。

もともと「おぼゆ」って動詞は、「思ふ」の未然形「おもは」に、奈良時代の受身・自発の助動詞「ゆ」がついたものさ。「おもはゆ」から「おもほゆ」に転じて一語化し、さらに「おぼゆ」に転じたんだ。だから、「おぼゆ」が「（誰かに）思われる」という受身の意味を表したり、「（自然と）思われる」という自発の意味を表すのは当たり前なんだよ。

「思ふ」の尊敬語「おぼす」も同じ。「思ふ」の未然形「おもは」に、奈良時代の尊敬の助動詞「す」

がついて、「おもはす」から「おもほす」に転じ、「おぼす」となった。だから、「お思いになる」という意味を表すわけだ。

●「おぼゆ」と「おぼす」

おもふ ＋ ゆ　（奈良時代の受身自発の助動詞）　**おもふ ＋ す**（奈良時代の尊敬の助動詞）
←　　←
おもはゆ　　**おもはす**
←一語化　　←一語化
おもほゆ　　**おもはす**
←　　←
おぼゆ　**（思われる）**　　**おぼす**　**（お思いになる）**

おもしろいのは、この「おもほゆ」「おもほす」が、たとえば『源氏物語』では、「おぼす」と同時に用いられてるってことなんだ。だから古い表現には違いないが、けっこう後まで用いられてたってことだね。同じ意味だと考えていいけれども、微妙な使い分けはあったのかもしれない。

さて、この「おぼゆ」は「（誰かに）思われる」という受身の意味をもっているから、それが名詞化した「おぼえ」も、「人からの思われ方」という意味をもつのは当然！　だから、世の人々からの思われ方から転じて、「名声」って意味をもつようになったんだ。わかった？

ところで、中井は、チコちゃんみたいに、よく人に「なんで？」って聞くんだ。なぜそういう意味を表すのか、なぜそういうしくみになっているのか、そこを知りたい！　そのいきさつや歴史を知ろうとせずに、ただやみくもに丸暗記するなんてのは、学問じゃないんだよ。よ～くわかっとけ！

・「出できにけり」は、もひとつ漢字を足して書くと、「出で来にけり」だ。「出で来」は、複合動詞だけど、カ行変格活用動詞だぜ。文法の本には力変動詞は「来」一語ってよく書いてあるけど、それは単独の動詞の話であって、複数の動詞の組み合わせからなる複合動詞は別なんだ。だから、「去り来」「詣で来」「持て来」とかも、力変動詞だってことに注意して！

さて、「出できにけり」の品詞分解は、よくある形なんで、きちんとマスターしとこう。品詞分解は下からやれ！だったね。過去の助動詞「けり」は、活用語の連用形に接続するんだから、「に」は迷うことなく連用形。「に」は、助動詞だと踏んで、連用形が「に」になる助動詞は、完了の助動詞「ぬ」と、断定の助動詞「なり」だ。でも、断定の助動詞「なり」は、体言か活用語の連体形にしか接続しないだろ？「出でき」が仮に「出で来」と表記してあったとしても、連体形は「出で来る」なんだから、あり得ない。

つまり、この「に」は、その語自身の活用形が連用形で、しかも上の活用語に連用形を要求する語なんだ。さあ、助動詞の活用表を見てみよう。ほら、そんなの完了の助動詞「ぬ」しかないじゃないか。はい、これできちんと説明できました。

ちなみに、「～にけり」は、めちゃめちゃ頻繁に用いられる表現なんで、いっそのこと品詞分解を覚えておく方が早いよ。中井は活用表を覚えたことがないって、前に言ったけど、高校生もかなり早い時期に頭の中に放り込んじゃって、もう力ビが生えてるぐらいさ。何形かなんて考えたこともないよ、当たり前過ぎて。

〔読解・鑑賞〕

・「小式部、これより歌詠みの世におぼえ出できにけり」と書いてあるってことは、それまではそれほど歌人として有名じゃなかったわけだね。でも、この事件をきっかけとして周囲の見方が変わった。まあ、もともとチョー有名歌人のママ、和泉式部の娘ってことで、それはさぞかし親の偉大さが彼女のプレッシャーになってたんじゃないかと察するなぁ。親がすごいんだから、子供もできて当たり前だとか、できたらできたで親に助けてもらってんだろとか、今でもそういう無責任なつっこみあるもんなぁ。小式部内侍がそこんところどう思ってたのかは、もちろんわからんけど、ともあれこの事件がきっかけで、実力が認められ始めたってことだね。よかった、よかった。

これはうちまかせての理運のことなれども、かの卿の心には、

この一文長いんで、ここでとりあえず切るとして。「うちまかせての理運のこと」ってのは、脚注にあるとおり、「ごく普通で、当然のこと」とするとして、この部分訳してごらん。「『これはごく普通で、当然のことだけど、あの卿の心には』って感じですかぁ？」うん、いいね。「かの卿」ってのは誰？　「はい、もちろんあいつですよ、定頼。」そうそう、よくわかってるね。

〔文法〕

・まずは品詞分解しとこう。

代	係助・区別	副	格助・連体修	名	格助・連体修	名
これ	は	うちまかせて	の	理運	の	こと
×	×	×	×	×	×	×

助動・断定　接助・逆接確定

なれ　ども

已然　×

・まず、「うちまかせて」というのは副詞で「普通に・一般に」という意味。これに格助詞「の」をつけた表現だね。「理運」が「道理にかなっていること」という意味だから、「うちまかせて理運」と表現すれば「普通に道理にかなう（こと）」になるが、「の」をつけることで、「普通の道理にかなうこと」ぐらいの意味になる。我々も「ただの迷信」とかいうだろ？　似た表現になるね。

・「ことなれども」は、ちゃんと品詞分解できるように。「ども」は逆接の確定条件を表す接続助詞だろ？　1年生の一番最初にならったよね、必ず活用語の已然形に接続するって。だから上の断定の助動詞「なり」は已然形になってる。「なれ」だから已然形って考えるんじゃない、「ども」が接続しているから已然形なんだよ。そして、「なり」は体言、すなわち名詞か、活用語の連体形接続だ。「こと」は名詞だから、ほら、きちんと説明できたよね。

〔読解・鑑賞〕

・「これは、うちまかせての理運のことなれども」ってのは、「これは普通の道理にかなうことであるが」って意味だよね。もっと簡単に意訳すると、「これは、普通の当然なことだが」ってことになる。さて、じゃあいったい「普通の当然なこと」って、なにが？　「はい！『これ』です！…って、もちそれじゃだめですよね？」うん、もち。「つまり『これ』の指示内容を答えよってこと？」うむ。「う～ん…定頼がびっくりしたこと？」「え～！　続きを読んでみろよ、定頼はわかってなかったって書いてあるみたいだぜ。」お～、よく読んでるじゃないか！「そもそもこれ誰のことば？」うんうん、どんどん接近中！　「はい、先生、これたぶん作者の言葉ですよね。だとしたら、作者が『普通の当然のこと』って言ってるってことでしょ？」そうそう。「俺、わかったし。作者は小式部よりずっと後の時代の人やろ？小式部がすごい歌人だって知ってたはずやん。だから、それ知ってる作者からしたら、これしきの歌詠むのは、小式部にとってごく普通のことやって思ったってことちゃう？」す、すばらしい！　その通りだよ。

つまり、君らが解き明かしたように、これは『十訓抄』の作者のことばだね。小式部内侍がこの事件の後、本来の才能を発揮して、和歌の世界で大活躍したことを知ってるから、定頼中納言のからかいに対して、即座に即興の歌で反論するぐらいのことは朝飯前だと思ってるわけさ。

かの卿の心には、これほどの歌、ただ今詠み出だすべしとは、知られざりけるにや。

ここは、さっき続きを読んでた君に訳してもらおうかな。「まかしといて。『あの定頼卿の心には、これ

ほどの歌を、すぐに読み出すことができるとは、おわかりでなかったのでは？』だろ？かんちこちんや！」さすがだねぇ、力つけてきたね。

〔文法〕

・ちょいと長いが、まとめて品詞分解しとこう。

か	の	卿	の	心	に	は、			
代	格助・連体修	名	格助・連体修	名	格助・場所	係助・区別			
×	×	×	×	×	×	×			
これ	ほど	の	歌、	ただ今	詠み出だす	べし			
代	副助・程度	格助・連体修	名	副	サ四動	助動・可能			
×	×	×	×	×	終止	終止			
と	は、	知ら	れ	ざり	ける	に	や。		
格助・引用	係助・区別	ラ四動	助動・尊敬	助動・打消	助動・過去	助動・断定	係助・疑問		
×	×	未然	未然	連用	連体	連用	×		

・「かの卿」は、漢字で書けば「彼の卿」だ。つまり「か（彼）」は、話し手から見て遠いものを指す代名詞だ。普通、「かの（彼の）」の形で使われる。「かの卿」は、さっき彼が訳したように、「あの卿」で、定頼中納言を指してる。

・「これほどの歌」は、「これほどの素晴らしい歌」とでも理解しとけ。

・「ただ今、詠み出だすべし」は、「すぐさま詠み出すことができる」って意味。「ただ今」は、「今・現在」という意味の名詞が副詞に転じたもの。「今・今すぐ」という意味と、「たった今・つい今し方」という意味の二つの意味で用いられるけど、ここではもちろん前者だな。君らさ、帰ってきた時に、「ただいま！」って言うじゃないか。これどういう意味だい？　「『ただいま、帰りました！』ですかぁ？」うん、そう！　な？　さっきも言ったように、ことばの元々の歴史やなりたちを知るのっておもしろいだろ？

・「詠み出だすべし」の「べし」は、もちろん助動詞だけど、「べし」って、めちゃめちゃ意味が多いじゃないか！　「すいかとめてよ」なんて習ったろ？1年の時に。え？「『よ』なんて習ってない」って？

「すいかとめて」は、推量・意志・可能・当然・命令・適当の、それぞれの頭をとった覚え方なんだが、それに予定（～ことになっている）を加えたのが「よ」の正体だ。ちと覚えとけ。

もともと「べし」という助動詞は、「うべ」（宜）が語源だという説が有力。「うべ」は「もっともだ」って意味で、つまり「べし」の元々の意味は当然・適当が本来だ。して当然だろうと推量すれば、推量の意味になるし、できて当然と思えば可能の意味になる。して当然だと人に強いれば命令になるじゃないか。「わかった！『して当然だからやろう』と思うから、意志の意味になるんですね！」そうそう、いいねえ、どんどんわかってくるじゃないか。

で、ここで定頼中納言は、小式部内侍の才能を知らなかったから、当然できるだろうとは思わなかったわけだ。「べし」は、もともとは当然・適当の意味が基本で、そこから色んな意味が生まれてくるから、合体形だってあっていいはず。つまり、ここの「詠み出だすべし」だって、「詠み出すことができるだろう」って訳したって、全然問題ないんだよ。

・そして最後の部分、「知られざりけるにや」だが、ここは品詞分解が、ちとばかり難しいかもな。まず、こんなふうに**文末が「～にや」で終わってる時は、後に「あらむ」が省略されていることを疑え！** これが文法理解のコツだ。つまり、ここも「知られざりけるにやあらむ」の省略形ってこと。だから、省略した部分も含めて訳せば、「おわかりでなかったのであろうか」ってなる。

さて、ここからが大事だぜ。この表現は、実は次のように説明できる。

知られざりけるなら**む**
↓ 断定の助動詞「なり」を未融合形「にあり」にする
知られざりけるに**あら**む
↓ 疑問文にするために、「に」と「あり」の間に係助詞「や」を入れる
知られざりける**にやあら**む

キモは、「にやあら」の係助詞「や」を取り除けば「にあら」になるってとこだ。「にあら」を10回早口で言ってみな。「にあら…にあら…にあら…にゃら…にゃら…なら…なら…」ほら、「なら」になっただろ？　つまり、「なり」は元々「にあり」だったのが、融合して一語になったもの。本来は格助詞「に」とラ変動詞「あり」からなるものだが、助動詞「なり」を「～にやあらむ」（～であろうか）とか「～にはあらず」（～ではない）などの形をとって、「に＋あり」の形で用いるときの「に」は、元の格助詞で

はなく、断定の助動詞「なり」の連用形とするんだ。覚えとけ！

さて、「～にやあらむ」や「～にはあらず」などの表現は、「に＋あり」の間に係助詞（「や」「は」など）が入ったものだが、係助詞が間に入っても、前後の接続の関係は変わらないんだ。「え？どういうこと？」って？　つまりな、「や」「は」があろうがなかろうが、「に」は「あり」にかかっているってこと。つまり、「に」は用言「あり」に連なるのだから連用形だってことさ。だから、「知られざりけるにや」の「に」は連用形だとわかるんだ。ＯＫ？

さっき「文末が「～にや」で終わってる時は、後に「あらむ」が省略されていることを疑え！」って言ったよな？　でも、「～にや」で終わってるときの「に」が、いつも断定の助動詞「なり」の連用形だとは限らないぞ。たとえば、「静かにやあらむ」（静かであろうか）って場合だってある。これは「静かに」がナリ活用形容動詞「静かなり」の連用形だろ？　どうやって見分けるんだ？　「はい！これは最初の授業で習いましたよぉ。『いと』をつけて意味が通じれば形容動詞、通じなければ断定の助動詞ですよね？」いいねぇ、ちゃんとマスターしてるじゃないか。

・さ、くどいけど、この部分の品詞分解のしかたを復習するぞ！　「品詞分解は下からやる」が合理的だったんだよね。

まず、「や」は係助詞だね。下に「あらむ」が省略されてるんだった。だからその上の「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。ってことは、さらにその上の語は体言か活用語の連体形だ。ここはもちろん過去の助動詞「けり」の連体形。ってことは、その上は絶対連用形。打消の助動詞「ず」の連用形が「ざり」だよね。ってことは、絶対その上は未然形。「れ」は尊敬の助動詞「る」だけど、未然形も連用形も「れ」だろ？　それだけを百年見ててもどっちかわからん。下に打消の助動詞「ず」があるから、未然形と決まるんだ。で、この尊敬の助動詞「る」は、四段・ナ変・ラ変動詞の未然形に接続するんだから、「知ら」を見ると、ナ変・ラ変はあり得んから、四段動詞の未然形だと確定！　ほら、簡単でめっちゃスピーディーだろ？　いちいち活用表を頭に思い浮かべてるようではまだまだだぜ。文法ってのは法則なんだ。形を丸暗記するよりも、法則を覚えたほうが実戦的だぞ！

・「先生！　最初の予習課題で、ここの『られ』を説明しろってあったじゃないですか。今の説明聞いてると、一語じゃないですよね。どう答えたらいいんですか？」うん、そうだね、その課題の答え合わせをしようか。

まず、答えを言う前に、文法説明問題の鉄則を言っとくぞ！　**「文法説明問題の傍線部を信じるな！出題者は君たちを騙(だま)しにかかっている！」**だ。線が引いてあれば、いかにもそのまとまりに見える。たとえば、この「られ」が典型的な例だな。いかにも１語に見えるじゃないか。しかし、そこには出題者の悪意がこもってるんだ、へへへ…　引っかかれよ、引っかかれよ…　ほら、引っかかった！　わははは…的なね。（「嘘でしょ…こわ…」）　まあもちろん冗談だが、見分けにくいところに、あえて誤解させるような傍線を引くんだから、悪意とも言えるよな。予習課題３文については、中井の悪意がこもってたってこ

とさ。

さて、「知られざりけるにや」の「られ」の説明からだ。もうわかったと思うけど、「ら」は「知ら」の「ら」だろ？ したがって、「ラ行四段活用動詞『知る』の未然形活用語尾」だ。いいかい？用言の場合は、活用の種類（ラ行四段活用）、品詞（動詞）、基本形（『知る』）、活用形（未然形）、そしてその他の情報（活用語尾）、これだけのことをきっちり押さえる。どれか抜かす「うかつな奴」が実に多い。ふだんから、きっちり説明するように心がけろよ。

そして、「れ」は、さっき説明したように、「尊敬の助動詞『る』の未然形」だ。助動詞の場合は、まず意味（尊敬）、品詞（助動詞）、活用形（未然形）、この3つをしっかり押さえる。いいかな？

したがって、**「知られざりけるにや」の「られ」の文法説明は、「ラ行四段活用動詞『知る』の未然形活用語尾と、尊敬の助動詞『る』の未然形」**と答えればいい。どうだった？合ってた？

・次は、「歌詠みにとられて詠みけるを」の「られ」だね。君、わかる？ 「え～と、受身の助動詞『られ』… 違いますよねぇ…」うん、違うねぇ。しっかり傍線にだまされてるよ。「あ、わかりました！ 動詞「とる」と受身の助動詞だ！」うん、そうそう。それをきちんと説明すると？ 「えっと… ラ行四段活用動詞の「とる」の未然形と、受身の助動詞「る」の連用形！」惜しいなぁ、「ら」だけやしね。「あ、活用語尾だ！」うん、そうだね。

つまり、**「歌詠みにとられて」の「られ」を文法的に説明すると、「ラ行四段活用動詞『とる』の未然形活用語尾と、受身の助動詞『る』の連用形」となる。**

・最後に3つめ、「局の前を過ぎられけるを」の「られ」。ねえ、君、これは1語かい？2語かい？ 「先生、おれ、自信あります。これは1語です。ご説明申し上げましょう。尊敬の助動詞『らる』の連用形です！ 間違いなし！」お～、お見事！ どんどんパワーアップする奴が増えてくるなぁ。うんうん。

はい、彼が見事に正解したように、**「局の前を過ぎられけるを」の「られ」は、「尊敬の助動詞『らる』の連用形」だ。**

どうだい？みんな合ってたかな？

〔読解・鑑賞〕

・このお話、最後まで読み終わったわけだけど、今日やった「これはうちまかせの理運のことなれども」以降は『十訓抄』の作者のことばだよな。どういう思いをこめたんだろ？ 実は、『十訓抄』という説話は、君らみたいな若い人向けに、いろんな教訓的なお話を、テーマごとに分類したものなんだ。こういうことすると、こうなっちゃうからあかんよとか、こういうときはこうせんとあかんよみたいにね。

だとすると、このお話は、どういう教訓なんだろ？ どう、君。「そりゃ、もう人を馬鹿にしたらあか

んよでしょ。」うん、君は？「あたしもそう思います。」うん、そうだね。

実は、このお話は「不可侮人倫事」（人倫を侮るべからざる事）というテーマに分類されたものなんだ。「人倫」は「ひと」という意味だから、まさに君らが言った「人を侮ってはいけないこと」というテーマになる。

この『十訓抄』の成立は13世紀中頃だから、小式部内侍が生きていた頃から200年以上経ってる。小式部内侍が母の和泉式部に劣らぬ優れた歌人として大活躍したということは、作者やその時代の人にとっては常識なんだな。でも、定頼中納言がからかった時には、まだそれほどその才能が知られてなかった。これが、この話の一番大事な設定なんだ。

つまりね、いわば駆け出しの歌人が歌合の詠み手に選ばれたんだから、ある程度なめられるのはしかたのないこととして、定頼のからかいにすぐさま即興の歌で応酬したこと自体は、後の小式部の活躍からすれば、別に不思議でもなんでもない当然のことなんであって、この話の主題じゃないんだよ。問題は、最後に作者が述べた「あの定頼卿の心には、小式部がこれほどの歌を、すぐさま詠み出すことだできるとはおわかりでなかったのでは？」ということばにある。

前にも言ったように、定頼中納言は、平安時代きっての秀才藤原公任の息子だぜ。でも、息子の定頼も親の名を辱めない才能をもって、周囲から認められていたんだったね。それからしたら、歌を詠みかけられて、小式部と同様に、すぐさま小式部を上回るほどの秀歌で返歌をするぐらいのことは、別に難しいことでもなんでもなかったはずなんだ。その程度のことができないようでは、公任の息子とは言えんからな。なのに、できずに「こ、こんなことがあるか…」なんて言って、その場を逃げ出した。そこだよ、ポイントは。「うろたえちゃったわけですよねぇ…」「人ばかにすんのって、上から目線でないとできひんやん、それを逆に上から見られちゃったとか…」「からかったつもりなのに、自分がからかわれちゃったともいえるなぁ…」「ずばり、人間はなにより平常心！ それ失っちゃったら、実力もへったくれもないよ、逃げるしかない。」うん、君らの言う通りかもな。ほんとならたやすく対応できたはずの秀才定頼が、逃げるしかなくなっちゃったのは、確かに、さっき彼女が言ったようにうろたえちゃったんだよね。そして、秀才にはあるまじき恥をかく。「人倫を侮るべからざること」、作者の言いたいことわかったかな？

〔敬語の学習〕

・　さて、『大江山』を一通り読み終わったんだけど、残るは何カ所かでてきた敬語の確認だね。一年生で一通りは習ってると思うんで、ズバズバ聞くぞ。

まずは、10頁4行目の「丹後へ遣はしける人は、参りたりや。」からだ。

「遣はす」の敬語表現を説明してごらん。え？「敬語なのか？」って？ おいおい、「派遣する」という意味の動詞「やる」の敬語だよ。あれ？ 急になんか君ら押し黙ってるなぁ…もしかして敬語に自信が

ないとか？　う～ん…イチからやらんとあかんとか？ う～ん…とりあえず基本を押さえなおそう！

・敬語には3種類あるよね。うん、そう、尊敬・謙譲・丁寧の3つ。これに丁重と美化を加えて敬語の5分類もあるけど、君らが古文の敬語を考える時は、さっきの3つでいい。

●敬語の3種類

・尊敬表現 … 動作主に敬意をこめる表現
・謙譲表現 … 動作の受け手に敬意をこめる表現
・丁寧表現 … 言葉ぶりを丁寧にして、直接聞き手や読み手に敬意をこめる表現

それぞれどういうしかたで相手に敬意をこめるのかをきちんと押さえるのがポイントだよ。

そもそも、敬語がわかるというのは、**「誰から、誰に対する敬意をこめた、どんな表現か」**をきちんと説明できるってことなんだ。

まず、「誰から」っていうのは、敬意を誰がこめるのかってこと。これは決まってる！　敬語を表現した人だよ。当たり前だよ。表現してない人が敬意をこめられるはずがない。つまり、会話文なら、しゃべってる人。地の文なら、作者だよ。ここをまず押さえろ！

次に、「誰に対する」は、敬意の方向。動作主を高めようとしてるのか、動作の受け手を高めようとしてるのか、あるいは聞き手や読み手を高めようとしているのかという判断だが、それに応じて、ふさわしい表現のしかたがあるんだ。

たとえば、「校長先生が、あなた方に、お話になる」と中井が言ったとして、これは、中井が校長先生に敬意をこめたいわけだ。話すという行為をするのは、校長先生だから、動作主を高める尊敬表現を使えばいい。だから「お話になる」と言ったわけ。これは、「中井から、校長先生に対する敬意をこめた、尊敬表現」になる。

次に、「さきほど、うちのクラスの太郎が校長先生に申し上げました」と、やっぱり中井が言ったとする。「校長先生に言った」では、校長先生に失礼だろ？　だから、校長先生に敬意をこめたいところだけど、「言った」という動作は太郎の動作だから、尊敬表現を使うわけにはいかん。そこで、太郎の動作を下げた謙譲語「申し上げる」を用いることで、相対的に受け手の校長先生を上げる。そうすることで、校長先生に敬意をこめることができるんだ。つまり、これは、「中井から、校長先生に対する敬意をこめた、謙譲表現」になる。

最後に、中井が君らに「あそこにライオンがいます」って言ったとする。ライオンに敬意をこめるわけないだろ？　誰に敬意をこめてんだ？　中井は、「ライオンがいる」じゃなくて、「ライオンがいます」

と言葉ぶりを丁寧にすることで、君らに敬意をこめたんだよ。つまり、「中井から君らへの敬意をこめる丁寧表現」てことになる。わかった？　だから、生徒指導部長の中井が、君らに「遅刻するな！」じゃなくて、「遅刻してはいけません」と言うのは、君らに敬意がこもってんだぜ。

古文の敬語が苦手な奴ってのは、例外なく現代語で、ちゃんと敬語を使えない奴だよ。たとえばさ、君らが職員室に入ってくるとき、「川井先生いますか？」とか、よく言うだろ？　そう問われた中井は必ずこう言うぜ。**「君は、私には敬意をこめる気があっても、川井先生に敬意をこめる気は、さらさらないんだね。」**ってさ。この意味がわからなきゃ、敬語は永遠にわからんよ。

・　さて、話を『大江山』に戻そう。

「丹後へ遣はしける人は、参りたりや。

（訳　（あなたが母君のいる）丹後におやりになった人は、（戻ってあなたのところに）参上したか。）

訳を参考に、考えてみよう。「遣はす」（おやりになる）は、「やる」（行かせる）の尊敬語だが、これを表現してるのは、だれ？　そう、定頼だよな。ここで定頼は小式部に敬意をこめたいが、「やる」という動作は小式部の動作だから、それを高めるには尊敬表現を使えばいい。したがって、**「定頼から小式部に対する敬意をこめた尊敬表現」**になる。

次に、「参りたりや」の「参り」はどうかな？　これ、敬意のない表現にすれば、「来たりや」（来たか）になる。つまり、誰の動作だい？　もちろん使者だよ。でも、定頼は別に使者に敬意をこめる理由はない、ここは、小式部に敬意をこめるために、あえて使者を下げて「参り」（参上し）と表現することで、動作の受け手小式部を相対的に上げたんだ。つまり、**「定頼から小式部に対する敬意をこめた謙譲表現」**になる。

大丈夫かなぁ？　ちゃんとわかってる？　特に謙譲表現はつまづくひとが多いよね。それは、よく「自分がへりくだる表現」と思い込んでるからなんだ。それ自体まちがってはいないけど、そう考えるより、「動作の受け手を高めたいから、動作主を下げる表現」と考えた方がわかりやすいよ。

いかに心もとなくおぼすらむ。」と言ひて、局の前を過ぎられけるを、

（訳　（あなたは使者の帰りを）どんなに待ち遠しくお思いでいるだろう」と言って、（定頼中納言が、和泉式部の）自室の前をお通り過ぎになったが、）

これはどうかな？　まず、「おぼすらむ」は、定頼の言葉だよね。敬語のない表現なら、「思ふらむ」になるんだが、定頼は小式部に敬意をこめたいが、「思う」という動作は、敬意をこめたい小式部自身の

動作だから、尊敬表現にして「おぼす」を使ったわけ。つまり、**「定頼から小式部に対する敬意をこめた尊敬表現」**になる。

次に、「過ぎられけるを」は、誰の表現だい？　そう、今度は作者だよね。作者は、定頼に敬意をこめたいんだが、この「過ぎ」という動作は定頼自身のもの、つまり定頼が動作主だから、尊敬の助動詞「らる」を用いて、動作を高めたんだよ。つまり、**「作者から定頼に対する敬意をこめた尊敬表現」**になる。後に出てくる「袖を放ちて逃げ**られ**けり」も全く同じだね。

ちなみに、「ただ今詠み出だすべしとは、知ら**れ**ざりけるにや」も、これと同じなんだが、用いている助動詞が「らる」「る」という違いはある。これは、もちろん上の動詞の活用の種類が違うからだよ。前に説明したぜ。

キンコンカンコ～ン♪　キンコンカンコ～ン♪　…

おやおや、タイムオーバーだよ。今日の授業はここまでだ。でも、どうも敬語の理解が怪しそうだね。もうちょっと補強がいるみたい。

にっくきコロナのせいで休校が続いてるけど、世間の様子をみてると、そろそろ学校再開しそう。でも、当分は完全に元には戻せないだろうから、ためぐち授業をもうちょっと続ける必要がありそう。

そこでだ、ためぐち授業の方は、この後、漢文をお休みにして、敬語のパワーアップをはかることにする。古文の教科書に『竹取物語』（かぐや姫の昇天）が載ってるから、それを題材にやってみよう。そのつもりでね。

さあ、今日も色々学んだろ？　ワークシート埋めて、しっかり復習しとけよ。

じゃあな！

2年古典（古文）『大江山』3　ワークシート

二年　　組　　番〔　　〕

①次の傍線部の「られ」を文法的に説明しよう。

・歌詠みにとられて詠みけるを

・局の前を過ぎられけるを

・知られざりけるにや

②次に文を口語訳しよう。

・小式部、これより、歌詠みの世におぼえ出できにけり。

・これほどの歌、ただ今詠み出だすべし。

③次の傍線部の敬語表現を説明しよう。

・「丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなくおぼすらむ。」と言ひて、局の前を過ぎられけるを、

A・〔　　〕から〔　　〕に対する〔　　〕表現

B・〔　　〕から〔　　〕に対する〔　　〕表現

C・〔　　〕から〔　　〕に対する〔　　〕表現

D・〔　　〕から〔　　〕に対する〔　　〕表現

2年古典（古文）『大江山』3　ワークシート（解答例）

二年　　組　　番〔　　〕

①次の傍線部の「られ」を文法的に説明しよう。

・歌詠みにとられて詠みけるを
　ラ行四段活用動詞「とる」の未然形活用語尾と、受身の助動詞「る」の連用形

・局の前を過ぎられけるを
　尊敬の助動詞「らる」の連用形

・知られざりけるにや
　ラ行四段活用動詞「知る」の未然形活用語尾と、尊敬の助動詞「る」の未然形

②次に文を口語訳しよう。

・小式部、これより、歌詠みの世におぼえ出できにけり。
　小式部は、これ以降、歌人の世界で名声が出てきた。（名声が高まった。）

・これほどの歌、ただ今詠み出だすべし。
　これほどの（すぐれた）歌を、すぐさま詠み出すことができる。

③次の傍線部の敬語表現を説明しよう。

・「丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなくおぼすらむ。」と言ひて、局の前を過ぎられけるを、

A・〔定頼中納言〕から〔小式部内侍〕に対する〔尊敬〕表現

B・〔定頼中納言〕から〔小式部内侍〕に対する〔謙譲表現〕表現

C・〔定頼中納言〕から〔小式部内侍〕に対する〔尊敬〕表現

D・〔作者〕から〔定頼中納言〕に対する〔尊敬〕表現